

B-1-2 気管内チューブの固定の違いによる皮膚トラブルの調査

和歌山県立医科大学付属病院
 救急集中治療部・救命救急センターICU
 吉田純子 崎山瑞穂 内芝秀樹
 泉仁美 寺本ゆみ 岡室優
 藤本尚 川崎貞男 篠崎正博

【目的】 気管内チューブの固定をテープ固定と装具固定により、皮膚トラブルの発生頻度と程度に違いがあるか比較検討する。

【対象】 2004年2月2日から4月30日にICUへ入室した患者146人のうち、小児を除き研究に同意を得られた経口挿管患者55人を対象とした。

【方法】 3M社マルチポア粘着性綿布伸縮包帯(以下テープ)を使用したテープ群(33人)とLaeldal社トーマスチューブホルダーST(以下TTH)を使用したTTH群(22人)の2群に分けた。それぞれ1日1回、固定位置の皮膚および粘膜の観察を行い、皮膚トラブル発生率(皮膚トラブル新規発生件数÷全件数×100)、皮膚トラブル部位および程度、有症率(有症件数÷固定日数別件数×100)を調査算出し比較検討した。

【結果】

- 1.皮膚トラブル発生率は、TTH群(13%)よりもテープ群(24%)が高い割合を占めた。
- 2.皮膚トラブル部位および程度は、テープ群はテープ貼用部位である口角(38%)、頬部(38%)、口周囲(25%)に表皮剥離(87%)が発生し、TTH群は装具接触部位である口唇(67%)、口腔内(33%)に発赤(100%)が発生し、それぞれ特徴が示された。
- 3.有症率は、両群とも固定日数が長くなるほど

高くなつた。両群に差は認められないがテープ群の方が高くなる傾向を示し、10日目では全症例が有症していた。

【考察】 TTHはテープと比較し、皮膚と接する面積が広いこと、皮膚の牽引が少なく、直接皮膚に貼布しないことから皮膚トラブルが発生しにくいと考えられる。テープは粘着性があるため、テープを剥がすときの皮膚への影響が強く、伸縮による牽引が貼用部およびチューブ接触部への刺激または圧迫となり、皮膚トラブルが発生したと考えられる。TTHは同じ部位が長く圧迫されるため接触部の圧迫刺激による発赤が発生したと考えられる。皮膚トラブルの対策として、両群とも皮膚接触部にはドレッシング剤を貼用し、圧迫部にはワセリンを塗布することによって圧迫摩擦を回避することが必要である。テープは粘着度を低下させてから貼り替えることが重要であり、TTHは、ストラップの調整を行うことが必要である。

【結論】 TTH群は、テープ群と比較し、皮膚トラブルの発生が少なく軽症であった。皮膚と接する部位が皮膚トラブル発生部位である点で一致した。